

orpanos

TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

ウーラノス

Vol.10

JUNE 2002

「OTHPANOS(ウーラノス)」は、「天」を意味するギリシャ語です。新約聖書において、洗礼者ヨハネは、イエス・キリストが神であることを「天から来られる方は、すべてのものの上におられる(ヨハネ福音書3章31節)」と表現しています。この個所にもὀὐρανόςの語が用いられています。

特集

『ビジネスリーダー』

—地域社会と大学、その掛け橋に—

NEW WAVE T.G.U.

- NEW WAVE T.G.U.特集…①
- 学生たちは、今……………⑤
- 歴史を伝え、今に導く…⑥
- 学長室より……………⑦
- 新学部長より……………⑧
- 大学院より……………⑨
- 学部より……………⑩
- 国際交流センターより…⑪
- 研究所・センターより…⑫
- 図書館より……………⑬
- 教学組織……………⑭
- 就職部より……………⑮
- 入試センターより…………⑯

表紙：土樋キャンパス本館

国際的な価値観や豊かな人間性を育む幅広い教育は、学生たちの潜在能力を掘り起こし、将来に対する可能性を高め、生涯にわたって学び続ける基盤を構築します。東北学院大学の教育と研究の概要を伝えることによって、本学に託されている使命を再認識し、さらに前進したいと願っています。

『ビジネスリーダー』

—地域社会と大学、その掛け橋に—



今回は、昭和41年に本学を卒業され、この仙台の地を中心に活躍されています松谷一夫さんから、企業経営者と本学の卒業生としての双方の立場で、地域経済や景気の動向、経営理念、そしてその中で東北学院大学が期待されていることについて伺いました。

対談者：松谷 一夫 氏

昭和34年東北学院中学校、昭和37年東北学院高等学校、昭和41年東北学院大学文経学部経済学科を卒業後、本学に勤務し、昭和61年に退職。現在、株式会社「松や」代表取締役社長。本年4月からは本学大学院経済学研究科経営学専攻の「特別講義」において非常勤講師を務める。

倉松 功 学長

司会者：佐々木哲夫宗教部長（本誌編集委員会編集長）

場 所：本学土樋キャンパスにて

今に至る

大学時代における 自身の形成過程

司会 最初に、学生時代のことについてお話しいただきたいと思えます。

松谷 学生時代を振り返ると、グラウンドでサッカー部の練習をしている自分と図書館にいる自分の姿を思い出します。授業の空き時間は図書館にいましたし、外にいる時はサッカーをしていました。グリーブリーダーも務めました。また、日本サッカー協会がサッカーの専門家を育てるために、昭和46年、第1回コーチングスクールを行った時、第1期生として参加しました。全国から20代の学生や社会人が28名ほど集められ、その一員としてサッカーを科学的に学び、その後イギリスやドイツで研修を受けたのです。指導者養成のための基礎訓練は、会社を運営する上で貴重な体験となりました。もう一つは、卒業後、東北学院での勤務の中で、経理部門を経験したことです。経理の基礎知識をそこで学びました。この二つが今の自分の人生を形作ったと思います。

学長 指導者としての訓練と経理の知識を早い段階で学んだことは、その後の人生においてとても役立ったのでしょうか。

松谷 そうです。ほかにも、東北学院大学の建学の精神であるキリ

スト教を、東北学院中学・高等学校、大学、そして大学職員の期間、常に触れてきたことも今日の自分を形作った基礎になっています。行き詰まった時に、やはり聖書に向かい合っていたのです。聖書を通読することによって、その内容が自分の人生の中でつながっていくのです。

学長 学生時代に触れた礼拝や聖書が精神的なものとして培われ、それが人生の支えになったことは、すばらしいことです。

ビジネスリーダー

トップとしての経営理念と実践

司会 本学を退職後、家業を引き継がれました。経営者としての立場から、経営の理念や実践していることがありましたらお聞かせください。

松谷 学生時代、市場論の先生から、鮮魚店は斜陽産業だと言われたことがありました。しかし、私は、いわゆる家業ではなく、企業として経営していこうとの理念を持っていました。鮮魚店は、社会の食生活の分野を担当している職業であり、社会において必要とされている職業です。すなわち、社会貢献のできる企業でなければならぬと考えました。その社会貢献とは、魚の美味しさを広げ、そのために

雇用を創出させ、納税の義務を果たしていくという三つの柱です。企業的な考え方を導入することによって、会社を維持させる社会的責任が生じてきます。昭和61年頃の鮮魚店の平均的な売り上げは、年間3,000万円程度でした。しかし、私たちの目標は、とてつもなく大きなものでした。これまでの鮮魚店のイメージを一新し、夢を社員と共有し、目標を達成できたことは、経営者として大きな喜びです。

学長 経営者としての手腕を生み出した要因は、どこにあったのでしょうか。

松谷 私は、鮮魚店を経営していますが、魚を切ったことがありません。企業的な経営を目指すために、現場と一線を置いたのです。私の仕事は、人を育てること、また、市場の動向や店の経営に集中することではないでしょうか。



『ビジネスリーダー』

—地域社会と大学、その掛け橋に—

企業の求める人材



株式会社「松や」代表取締役社長

松谷 一夫 氏

司会 経営者として、多くの社員を抱えておられるわけですが、必要とされているのはどのような人材でしょうか。

松谷 一言で表現するならば、「汗をかくことをいとわない人」です。「時間が来ましたから帰らせていただきます」では商売になりません。お客さんがいるから商売ができるのです。経営者としての立場から言うならば、経済や法律などの知識も必要ですが、やはり、やる気と行動力だと考えています。

学長 新しい人材を求める時に、その人物の備える資質を見抜くのですね。

松谷 そこが最も重要な部分です。面接を重ねたり、直観に頼って評価することもあります。採用後、会社での経験や教育の成果によって、再度その人物を評価することが多いです。仕事をするためには、その目的や内容を理解しなければなりません。仕事の目的や内容に賛同し、積極的に行動することが大切です。むしろ、その人物の持つ資質と同時に、経営者の働きかけが重要です。

地域経済

仙台商圏の現状と展望

司会 地方都市仙台の長所や問題点、特徴などがありましたらお聞かせください。

松谷 都市部の空洞化という全国的な問題があります。去る2月に、仙台商工会議所主催の「第4回ア

メリカ最新流通事情視察」に参加しました。これは、定点観測によって、アメリカの小売業とその流通システムの推移を調査するものです。それによって、アメリカ的な空洞化が日本でも発生していることがわかりました。仙台都市圏の空洞化の主因は、地下鉄の開業により交通体系が変化したことです。南北副都心の形成や道路整備、大型店の郊外出店により、空洞化が生まれました。空洞化とともに危惧されることは、都心部の住人の元気が失われつつあることです。また、都心部の店は、あまり郊外に目を向けなかったのではと考えています。私は将来、人のいるところに店を移していこうと考えています。さらに、地方都市仙台では、東京や大阪などの企業の支店が、不景気になると簡単に撤退するという現象があります。そのような状況において、雇用を維持していくのは非常に大変ですので、地理的な枠組みに柔軟な対応をしなければならぬのです。

学長 そのような経営戦略を持って、当時の丸光デパートに出店し、その後、副都心の長町圏や泉中央圏に出店したのですね。

松谷 そうです。はじめは、仙台駅前が中心でした。しかし、地下鉄開業に伴い、ファッションビル「141」41」の中に店を出しました。そこは、宮城県庁や仙台市役所など通勤者の多い場所ですので、出店を疑問視する人もいました。しかし、交通体系の変化と通行量の変化の予測によって出店を決め、成功を収めました。一昨年は、仙台駅前の「エスパル」に出店しました。やはり、出店を心配する声がありました。が、

通行量から算出した来客数の確率を考えて出店しました。これも成功した例です。

学長 都市の発展とともに、通行量や来客数、販売額を予測して進出したのですね。進出をするためには、資金が必要ですが、銀行の貸し出しが困難な時もあったと聞いております。企業の経営をする上で苦労されたのではないですか。

松谷 確かに最初は苦労しました。一般的に考えるならば、お金がないので銀行に借りに行くのですが、実際は違いました。銀行は、お金がある人にしか貸し出しをしないのです。信用の大切さを経験的に学びました。

学長 流通機構の世界的拡大によって、魚を海外からも購入しているのでしょうか。

松谷 一企業が、直接、海外から購入するのは、危険を伴い負担も大きいので、現在は、他の会社や商社、市場を通して、共同購入という形態をとっています。今後、この方法は、拡大していくと思っています。

21世紀の視点

東北学院大学へ望むこと

地域社会において
東北学院大学が果たすべきこと

司会 東北学院大学が地域社会において果たすべきこと、また、期待されていることとは、どのようなこととお考えでしょうか。

松谷 東北学院大学が果たす役割を一言で表現するならば、「地の塩」です。決して大きな事業を成し遂

懐かしい出会いがそこにある
ホームカミングデー〔同窓祭〕
開催のご案内

10月19日(土) 土樋キャンパスを会場に、同窓生相互の親睦や現役学生との交流、また同窓生と大学の絆をより深めていただくために、ホームカミングデー〔同窓祭〕を開催します。ご招待者は、卒業後20年目、30年目、40年目、50年目の方々です。詳細は、東北学院時報でお知らせするとともに、ご招待者の方々には、直接ご案内をいたします。当日は、記念礼拝や講演会、パイプオルガンコンサートなどを企画しており、大学祭も同じ日に開催されます。ご学友の方々との再会や現役学生の姿を通して、当時は振り返っていただければと思います。

島崎藤村没後60周年記念 特別企画
『島崎藤村と東北学院』を開催

今年は、島崎藤村没後60周年にあたり、全国統一企画として、島崎藤村ゆかりの地でさまざまな記念事業が開催されます。島崎藤村は、明治29年9月から翌年6月まで、東北学院普通科(のちの中学部)の英語・作文担当教師として教鞭をとりました(当時25歳)。有名な「若菜集」の素地ができたのもちょうどこの時期です。

今回、全国展開の記念事業が開催されるのを機に、東北学院としてもこれに参加することになりました。本学では『島崎藤村と東北学院』と題し、10月15日(火)から20日(日)までの6日間、土樋キャンパスにおいて開催します。東北学院の歴史紹介や東北学院にしかない島崎藤村にゆかりのある貴重な資料の提示、記念講演などを行う予定です。多数の方々の来学をお待ちしております。

問い合わせ先
特別企画実行委員会事務局
(東北学院法人本部室
TEL.022-264-6464)
(東北学院大学図書館事務室
TEL.022-264-6491)

げるということだけではなく、地域社会との関わりにおいて率先して責任を負い、与えられた使命を確実に果たしていく積み重ねが大切なのです。それによって、信頼を得ることができ、大学の評価の向上にもつながると思います。

学長 大学と地域との位置関係を自覚し、何ができるのかを考えていかなければならないと思います。松谷 私たちも、東北学院大学とのつながりをさらに深めることによって、大学と地域社会の掛け橋になろうと考え、同じ仙台圏で活躍している東北学院大学の卒業生数名とともに、経営者の会である「地の塩会」をつくりました。従来の同窓会と明確に機能分担するために、大きな四つの目標を設定しました。一つ目は、同じ経営者として切磋琢磨していくこと、二つ目は、卒業後、数十年たったならもう一度大学で勉強すること、三つ目は、学生や大学を支援していくこと、四つ目は、経営者を育てていくことです。この目標を達成するために、地の塩になることをもいとわれない人間になろうというものです。さらに、学生のための就業体験の場を提供していきたいと考えています。

学長 そのような公共性を持った目標を定めている組織はNPOの特徴ですね。今後の発展を期待しています。本学の経済学部には、後継者養成を目標の一つに掲げている経営学科があります。学生が、起業家や経営者からその経験を学ぶことは非常に有意義です。また、学生の就業体験、いわゆるインターンシップ制度も拡大していただければ幸いです。

学生・教職員・同窓生への
それぞれの期待

司会 東北学院大学の学生や教職員、また、同窓生に対する期待など、大学の今後の歩みについてご助言いただければと思います。

松谷 経営者の立場からですが、大学には、国から交付される補助金という収入科目があります。しかし、民間企業には、補助金がありません。すべて自分たちの働きで収入を得なければなりません。大学を維持するのは国ではなく、教職員自らであるという意識を強く持つことが大切だと考えます。私は、東北学院大学勤務中に、7人の仲間の座長となり勉強会を月1回、退職するまで10年ほど続けていました。学生に関しては、その本分を果たすことが大切です。また、良き友を持つことも大切です。卒業後は、さまざまな人と出会う機会が多くあります。その出会いが人生を決めることもあります。出会いを大切にし、自分にふさわしい生き方を見つめることが大切であると思います。

学長 教育の公共性と私立大学としての立場を踏まえながら、健全な大学運営を実現するようにと常に自覚していきたいと思います。今後も、同じ地域社会にある企業の立場から、東北学院大学の歩みに対し、ご助言とご支援をいただきましたら幸いです。

司会 本日はお忙しい中、お時間をいただきましてありがとうございます。松谷さんの今後ますますのご活躍を祈念申し上げます。



本誌編集委員会編集長
佐々木 哲夫

INTERVIEW『学生たちは、今』

インターンシップ制度

未来と出会うチャンス



インターンシップ制度を利用して企業での就業体験をした本学経済学部4年相原伸彦さんと、受け入れ企業のセルコホーム株式会社代表取締役社長新本恭雄氏にお話をうかがいました。

経済学部一部
商学科4年
相原 伸彦さん

セルコホーム株式会社
代表取締役社長
新本 恭雄氏

— インターンシップに参加しようと思ったきっかけは何ですか。 また、一番印象的だったことは。

ゼミでフランチャイズの研究をしているので、実務を体験したかったこと、「輸入して卸す」際の外国との取り引きや、一生に一度の買い物である「住宅」の販売というスケールの大きいものを体験してみたいと思い、インターンシップに参加しました。

住宅展示場での営業や、建築の現場を見ることなどを体験させていただく中で、一番印象に残っているのは、住宅展示場での営業体験です。体験初日に家が売れたのです。販売担当の方の商品知識はもちろんですが、お客様の心を開いていく話題の豊富さと巧みなテクニックには驚きました。「プロ」の実力を見せつけられた思いでした。「自分を信頼してもらい、家を買っていただくのだ」という熱意が強く伝わり、「信頼と責任」について考えることができました。

— 体験後の感想と、今後どう活かしていきたいかを聞かせてください。

学生が自らの専攻によって、将来のキャリアに関連した企業の就業体験を行う、企業はそのような学生を受け入れる、それがインターンシップです。この制度を通して、講義や理論で学ぶことのできないものを学びました。また、多くの人との出会いも経験し、そのような体験が思い出深く、貴重な財産になりました。

社会に出ていくためには、広い知識が必要なのですね。現在就職活動中ですが、どのような職業に就いても、「お客様の満足と信頼」を信条にしていきたいと思っています。

— インターンシップ制度については、どうお考えですか。

当社はカナダとの取り引きもあることから、毎年カナダの大学院生をインターンシップ生として受け入れています。アメリカやカナダでは、勉強の一環としてのインターンシップがあるのですが、日本でも大学に入学した直後から、希望者には体験をさせるというように、より積極的に行ってもいいと思います。さまざまな会社を経験するということは、「自分に合う企業とは何か」「学生時代に何を勉強すべきか」がわかるということなのです。

— インターンシップ制度を利用して考えている学生たちへのアドバイスをお聞かせください。

学生を受け入れる側としては、企業での生活や会社の姿をありのまま学生に見てもらいますが、わずか2週間で企業の本質を見抜くことは難しいと思います。第一線で活躍している社員とお酒でも飲みながら本音を聞き出す、というのもいいアイデアかもしれません。「この会社はやりがいがあるか」「日々成長して行くという気持ちがわく会社か」などは、学生が社会人になっていく上でとても重要ではないでしょうか。

“企業は人なり”という言葉があります。優れた人材は、どのような業種の企業でも必要としています。職場の中でその仕事が自分のやりたいこととマッチしなければ、「いい人材」は「いい人材」として生きてこないのです。だからこそ、インターンシップ制度を早くから利用して、より多くの企業と出会ってほしいのです。インターンシップは、例えていえば“お見合い”のようなもの。身構えず、気楽にトライしてみるといいと思います。

シリーズ『歴史を伝え、今に導く』—— 第1回

働きつつ学んだ学生たち

東北学院労働会

経済学部教授 仁昌寺 正一

時の列車に乗って、その窓から東北学院の歴史風景を眺めてみることにしましょう。

東北学院の草創期に“労働会”という組織があったことをご存知でしょうか。自らの労働によって学資を得、東北学院で勉学を続けようとする苦学生たちによってつくられたものです。当時の押川院長の支援の下に、明治25年にスタートした同会は、4年後の明治29年には「会員熟れも非常の勤勉と信実を旨とし取扱うが故に目下大に信用を得て依頼者の日々増殖」(「奥羽日日新聞」明治29年6月21日)し、当時の学院生の半数に及ぶ90名余を擁する大きな組織になっていました。労働の種類も、新聞・雑誌配達、和洋洗濯、味噌・醤油販売、搾乳・牛乳配達、石油販売などに拡大していました。中でも「新聞雑誌及び回状の配達等は既に同会に於て市中の全権を握れるか如きの盛況」(「河北新報」明治30年1月28日)ぶりでした。きっと仙台市内を駆け回る学院生の姿が朝早くから頻繁に見られたことでしょう。

労働会の学生たちは、学校での勉学以外にもさまざまな活動を行っていました。その中でも注目すべきものとして、同会の機関誌『芙蓉峯』の発行があげられます。明治29年4月から発行された同誌には「論説、雑録、逸話、その他文学上警拔雅麗にして趣味に富める文字多く一読するの価値あり」(「奥羽日日新聞」明治29年4月11日)とか、「基督教主義世界的一大理想より湧出せる丈ありて所謂潤大に且温雅筆力亦勇健東北青年雑誌中、優に其第一位を占む」(「仙台新聞」明治29年11月1日)という評価が寄せられたのでした。ちなみに、同誌には当時文学担当教員として東北学院に赴任していた島崎藤村も寄稿しています。また、学院に入学を希望する受験生のために、毎日午後7時から9時までの2時間、英学、数学、漢学を教える夜学会を開設したりもしました。

働きつつ学び、そして多彩な活動を行っていた労働会も、明治時代の終わり頃から民間業者の組織的進出により労働分野が狭められていき、ついに大正10年3月、その幕を閉じました。しかし多くの優れた人材を輩出するなど「東北学院史の上に顕著な事蹟を遺した」(青木徹『東北学院労働会物語』)ことは間違いないでしょう。

第三者による大学評価
『相互評価』を実施

東北学院大学では、本年度、財団法人大学基準協会による大学評価『相互評価』を申請いたしました。高等教育機関としての使命を果たすために、近年、多くの改革・改善を行っています。その実績と今後の改革・改善のための方策に対する評価を、大学内部の自己点検とあわせて外部機関により実施することは、責任ある大学運営、そして開かれた大学としての姿をより明確にすることができるものと思われれます。今後明らかにされる『相互評価』の結果を踏まえて、さらに教育と研究の充実に努めていきます。

学都仙台
単位互換ネットワーク

「学都仙台単位互換ネットワーク」は本年度で2年目に入りました。1大学と1短期大学の新たな参加などにより、提供科目総数は798科目(昨年度487科目)に増加しました。本学での派遣「特別聴講学生」数は、前期に3大学と1短期大学へ8名、後期に5大学へ10名の予定です。また、受け入れ学生数は、6大学と1短期大学から30名を数えます。いずれも昨年度の約4.5倍の増加となりました。

今後も、さらに単位互換制度が充実し、「意欲ある学生に対して多様な学習機会を提供」し、現代社会に対応できる人材の育成に寄与していくことが期待されます。

From the President.

学長室より

ストラスパーガー学長のエッセー

学長 倉松 功

先日、本学の姉妹校アーサイナス大学のJ.ストラスパーガー学長から、『どなたが私たちの価値を自分のものとするのでしょうか?』という小冊子が贈られてきました。そこには8つのエッセーが収められています。昨年9月11日のアメリカにおける同時多発テロ事件の後の文集だけに、あの事件に触れたものが多く見受けられます。その中から「共通の土台に基づく対話」と題するものの抄訳を紹介したいと思います。

「共通の土台に基づく対話」

9月13日、私たちは、プラトンの『エウテュプロン(Euthyphron)』を読むことになっていました。あの(9月11日)の惨事は、誰にとっても、心を傷つけ不安にさせる瞬間でした。ニューヨーク市の消防士の息子を含む新入生のクラス16人にとっては、特に、そうだったと思います。

そのクラスで、私は、最初の質問をする必要が全くありませんでした。最初に学生が挑発的な主張をしました。すなわち、もし、ピン・ラディンや他の誰かが、神(God)もしくは神々(gods)に語りかけられて(あのような行動を起した)と思ったなら、そうでないと証明する方法はないというのです。理性が決定的な答えを与えてくれないと、人々は簡単に別な考えへ変節します。

プラトンの「対話」においてソクラテスが示唆していることですが、家族の価値、子供に対する私たちの愛の自然さ、共に生きてゆくことへの明確な期待など、神々や神がよしとするものに、私たちは、合意すべきなのです。もし、私たちがこれらの価値を普遍的なものとして認めるならば、子供たちや家族や共同体を破壊するような行動を、神々の望みを実現するのだとして単純に採用すべきではありません。

これは、ストラスパーガー学長ご自身の教養教育の授業体験レポートです。『エウテュプロン』は、本書にはじまり『ソクラテスの弁明』、『クリトン』

『パイドン』に至るソクラテスの死についての、プラトンの一連の作品の冒頭に位置します。ソクラテスは、知恵によって青年を墮落させ、伝統的神々を信じないで、新しい神を作るという理由でメレトスによって告訴されました。ソクラテスはそれに対して、あの『ソクラテスの弁明』をアテネ市民に向かって述べた後、自ら毒を仰ぎました。それは大した根拠もないのに一市民の告訴を簡単に取り上げる、墮落したアテネの民主主義に対する抗議となりました。しかし、プラトンによって、この事件をめぐっての一連のソクラテスの弁明、弟子達との対話が公にされ、現代に至るまで、真理と真理に生きる人間についての証言となったのです。

ストラスパーガー学長は、授業のテキストの『エウテュプロン』を、上記の諸文書の中で考察し、昨年9月11日のテロ事件との関わりで、宗教と正義・善・知恵などとの関連に言及しています。人間は、自分の政治的思想や体制を絶対化して、それを宗教のようなもの(疑似宗教)にします。また、宗教的理想や判断を、現実の世界にそのまま実行することがあります。いずれも同じようなものですが、前者は全体主義、後者はこの頃よく言われる原理主義というものです。ピン・ラディンはその2つの中のどちらのタイプであったのでしょうか? 彼が熱狂的なイスラム教徒だったとすれば、後者のように思われます。

この授業では、私の視点からすると、基本的人権としての個人と家族の尊厳と自由が、共通の根底、価値の土台となっています。それらの基本的人権は、キリスト教的に言えば、神によってすべての人間に与えられている恵み、あるいは創造の賜物ということになります。

それにしても、プラトンの著作を資料として、キリスト教やイスラムとの関わりにも触れながら、今日の世界に生きる全ての人々の共通の土台(価値観)を示そうとするストラスパーガー学長の複眼的な考察に感心しました。

「役立つ」「信頼される」法学部

法学部長 中村 英

4月に阿部純二教授を引き継ぎ、6人目の法学部長になりました。学部は今、「『法科大学院』の設置」と「法学部教育の見直し」という課題を抱えています。どちらも簡単ではないのですが、目指すのは任期中の実現です。思わず、「どうぞご協力を！」と声が大きくなってしまいます。

さて、今年は学部設立から37年。この間、制度も人も整備されてきました。法律の大学院は後期課程まで置かれ、教員には法学・政治学の、老壮青(もっとも以前のような超高齢者はいません)28人がそろい、それぞれの研究とともに、正規の教育だけでなく、課外の教育にも熱心です。特に、公務員試験の受験指導では成果が出ています。今春、公務員になった本学新卒者の4割以上は法学部生でした。高校の先生方や大学受験生のみなさんもこのことを承知してくれはじめています。

今後の課題の第1は「『法科大学院』の設置」です。この新型大学院は、弁護士や裁判官を育成する教育を専門にしますが、

学内の関係機関では2年後のスタートに向けて、カリキュラム、人事、施設などの検討を着々と進め、法人としての経費の積み立ても始めることになりました。

第2の、「法学部教育の見直し」も重要です。教育では、力のある学生をもっと伸ばさねばなりません。司法試験合格者、法科大学院進学者、それに国家公務員種試験や、県や県庁所在都市の上級合格者を育てることです。このためには、既存のコース制の見直しや、これまでの課外指導の一部を正規の課程に組み込むなど、さらに工夫が必要でしょう。また、他方では、いろいろな能力の学生に、丁寧な配慮をして、基本的な学習事項を確実に身につけてもらうことも肝心です。一人でも多くの学生に、法学部で大事にされた、と実感しながら、立派な社会人になる基礎をきちんと修得してほしいのです。

確かな成果をあげることで、この学部を、「役立つ」「信頼される」法学部に育てていきたい、と思っています。

新学部長より

抱負

工学部長 鹿又 武

工学部には、必修科目として4年生時に「卒業研究」という科目があります。工学部のような実学を主体とする学部では、学生教育の集大成として卒業研究を重視し、本工学部でも創立以来教育の中心としてきました。工学部では約10名前後の学生が各研究室に配属され、1年間教員と卒業研究を行っています。教員は単に教育・研究の指導だけではなく、就職相談などのチューターの役目もしています。私自身も熱心に学生指導をしているつもりですが、最近特に知識・技術の伝達が以前のようにスムーズにできなくなりました。何が原因かという断定はできませんが、多分学生との年齢差から生じる感性のギャップの拡大と体力の減衰ではないかと思っています。私の研究室では、春休みの2～3週間、新4年生と卒業していく4年生との間で研究の引き継ぎを行っています。わずか2～3週

間ですが、私の予想以上に知識・技術の伝達がうまくいきます。大学院生が4年生に教える場合は、さらに伝達がうまくいきます。これは教育システムの非常に重要なことを示唆しているようです。さまざまな教育システムの中で大切な事は、年齢の近い人が教えるのが良いということです。その理由として、教える側が今どこで何に引かかっているのか、近い経験者として理解できるからだだと思います。私の部長任期中には是非期限付き教員、大学院生チューターを含む若い優秀な教員を採用できるように努力したいと思っています。最後に一言、何も高齢の教員がダメと言っているわけではありません。高齢の教員には学識の深いことなど高齢の持ち味があります。いぶし銀の魅力があります。要は大学の教育・研究には教員年齢にバランスをとる必要があるということです。

経済学部で

「みやぎ県民大学」

平成14年度開放講座を開講

前年度事業の継続として平成14(2002)年度はこの事業をさらに発展させ、本学の学生・卒業生を含む宮城県民の希望者に対し、職業選択肢の一つとして起業、操業支援、企業のリエンジニアリング、リストラクチャリングを進めるための新たな知識と情報を提供することで、ポセキショナル・トレーニング(職業教育)及びリカレント教育を行います。

講師は経済学部の小柴徹修教授がコーディネーターとなり、木村光照工学部教授、佐伯昭雄氏(東北電子産業株式会社取締役社長)、Dr.CORTES(Pittsburg State Univ., Kansas/東北大学大学院フルブライト招聘教授)ほかがあたります。開講期間は7月13日から11月16日までに7回(土曜日)行うほか、7月27日には仙台近郊の企業を見学する予定です。



2002年度東北産業経済研究所シンポジウム企画案

歴史と文化を活かす町づくり

近年、伝統的なものへの見直し・再評価が行われるようになり、地域においても歴史や文化といった伝統的な素材を活かす町づくりの試みが、各地で行われるようになりました。

東北地方は、とすると「経済的に遅れた地域」とされることもありますが、それゆえに、伝統的な町並みが残された地域も多く、そうした素材を活かす町づくりも、始まっています。福島県では会津若松市や下郷町(大内宿)、宮城県では丸森町や登米町、山形県では山形市や高島町、岩手県では盛岡市や水沢市などがその先進的な事例でしょう。

今年のシンポジウムでは、東北地方において、そうした試みを行っている地域の事例を報告し、その中から「歴史と文化」を活かす町づくりの技法やそこの課題などについて、議論を展開したいと思います。



Summer is coming soon.

Graduate school info. 大学院より

文学研究科

ヨーロッパ文化史専攻の研究設備の充実

ヨーロッパ文化史専攻は、本学の文学研究科に設置されて以来、今年で6年目を迎えようとしています。キリスト教領域4名、西洋史領域5名の計9名から構成されるスタッフの下で、本専攻で研究に取り組む学生も着実に増え、前期博士課程12名(内社会人3名)、後期博士課程5名(内社会人1名)となりました。

このような体制の中で、着実に環境整備も行われてきました。まず、学生のための合同研究室と資

料室が設置され、合同研究室は主に前期博士課程の学生のために机とロッカーが配置されるとともに、学内LANと電話も敷設され、学内外からの情報収集などに大変便利になりました。

また、平成11年度と平成13年度の二度にわたる文部科学省の私学助成と本学の助成金によって、欧米諸大学の学位論文の収集に努めてきました。この学位論文コレクションは、アメリカの大学を中心とした約3,200点、イギリスの大学を中心とした約1,200点からなり、日本国内における最大の

学位論文コレクションとなっています。

さらに、今年4月から、大学附属研究機関として「ヨーロッパ文化研究所」が設置され、ヨーロッパ文化史専攻がその中心的役割を担って、ヨーロッパ文化に関する資料を広く収集することになっています。グローバル化した研究と教育のための新たな情報発信の場として、大いに期待されています。

キミも大学生気分!! 『オープンキャンパス2002』 開催のご案内

「東北学院大学ってどんなところ?」その問いに答えてくれるのが、8月2日(金)に泉キャンパスと多賀城キャンパスで開催される『オープンキャンパス2002』です。入学試験、授業内容、サークル活動、就職状況などの説明会や、最新設備を備えた図書館、オーディオ・ビジュアルセンター、情報処理センターを見学する施設ツアーなどを企画しています。高校生はもちろん、一般の方も参加できる『オープンキャンパス2002』、事前の申し込みや参加費は不要です。是非ご参加ください。

問い合わせ先
オープンキャンパス事務局
(総務部調査企画課内)
TEL.022-264-6424
FAX.022-264-3030
E-mail
c.kikaku@staff.tohoku-gakuin.ac.jp



昨年度のオープンキャンパス(泉キャンパス)

工学研究科

新ドクターの誕生と ロシアからの客員教授を迎えて

工学研究科の最近の話題を二つ紹介します。

その一つは、応用物理学専攻の博士課程に在学していた石川健哉さんが、星宮務教授の指導の下に博士論文「光熱電気化学検出法に関する研究」を提出し、去る3月25日に博士(工学)の学位を授与されたことです。

石川さんの研究は、光のエネルギーは物体に吸収されると熱に変わるといふ[光熱効果]と、一般に熱によって化学反応が促進されるといふ二つの効果を巧みに組み合わせて、

非破壊検査への応用の道を拓いたもので、世界ではじめてのオリジナリティの高い研究です。食塩水中に配置した電極の一方に断続的にレーザー光を照射すると温度が周期的に上昇し、その結果化学反応が進み、腐食のある場所に光が当たったときだけ大きく電流が変化します。この信号を検出して画像に再構成することにより、局所的な腐食の様子を詳しく知ることが可能になります。この研究は、既に国際学会などで高い評価が与えられており、選択的な非破壊検査への応用が強く期待されています。

もう一つの話は、この4月より半年間、ロシア連邦のモスクワ大学の物理学部よりウラジミール・イゴリーヴィッチ・ガ・リキン博士を客員教授として当研究科にお迎えしたことです。ガリーキン博士は素粒子物理学の第一人者であり、応用物理学専攻の樋口教授とは平成12年より共同研究をされており、その紹介で今回の来学となった次第です。本研究科としては、この半年間さらに一層共同研究を進めるとともに、専門の宇宙線物理学の講義をはじめとし、大学院の教育指導にも尽力して頂くつもりです。

Faculty info.

学部より



文学部

キリスト教学科の諸行事

キリスト教学科の1年の歩みは、4月、土樋キャンパスのラーハウザー記念東北学院礼拝堂での始業礼拝をもって始まり、翌年3月の卒業礼拝をもって終わります。特に卒業礼拝は、それに続いて行われる歓送会も在学生によって準備され、卒業生は礼拝の説教や司式、時には奏楽も担当します。卒業生の家族、友人、所属教会の関係者も参加し、厳粛な中にも和やかで希望に満ちたものです。礼拝をもって始め、礼拝をもって終わるところに、本学科の特長があらわれていると言えるでしょう。

毎年2回、5月と3月に開催される「キリスト教学科修養会」も本学科の特色を示すものです。キリスト教学科で習得する知識は観念的なものではなく、全人的なものであり、生活に結びついています。学びの実践、学びの完成のために修養会が用いられます。短期間でも日常を「中断」し、日常から一歩退いて、教師も学生も生活を共にしながら、聖書を学び、交わりを深め、一人ひとり自省する時です。ヒンズー教にもアシュラムと言われるものがあります。私たち現代人は、いつも能動的・活動的なだけでなく、時には受動的になってじっくり考える、あるいは何もしない、そのような時が必要なのではないでしょうか。3月の修養会には、毎年同窓生の参加があり、彼らの現場からの報告・発言は現役学生にとってよい刺激となっています。教師にとっても、現場の課題を知るよい機会となっています。



輝く教育・研究

ルネサンス英文学の政治性 / 審美性

文学部教授 箭川 修

私たちがルネサンス英文学として知る作品の多くは、騎士の余技として成立したものです。騎士には、多様な審美性が要求されました。上手に歌い、馬術・剣術・槍術を麗々しく披露し、廷臣・外交使節として上品な儀礼的行為を滞りなく実践することなどです。こうした騎士 = 文人の作品を理解するには、政治性に強く傾斜する近年の批評動向だけでは不十分です。政治性は、審美性の裏打ちを得てこそ有効であることを強調したいと考えています。



工学部

新生工学部の発足に際して

平成14年4月より、工学部の4学科は、それぞれ機械創成工学科、電気情報工学科、物理情報工学科、環境土木工学科とその学科名称を新たにしました。以下にこの名称変更に至る経緯と今後の抱負の一端を述べさせていただきます。

20世紀後半の技術革新は、社会のさまざまな側面に多大な影響を与え、このため、私たちの日常生活も大きく変貌しつつあります。その変革の中心をなすものは、コンピュータの飛躍的な発達と、その多方面にわたる応用の広がりです。工学という学問は、自然科学にその基礎を置きつつも、一面では実学的側面を併せ持つため、これらの社会変化に呼応する形で、その専門的な学問の内容も大きく変わりつつあります。過去の幾度かのカリキュラム改正の際にもこのことを考慮して、情報や環境といった新しい分野の内容が積極的にとり入れられてきました。これらの試みの集大成として、学科の名称をその内容に合ったものに変更した次第です。

21世紀の人類の行く手には、エネルギー問題や環境問題をはじめとして、解決を迫られている多くの課題が山積していますが、これらの解決を図る上で、工学技術が果たす役割は小さくないと考えます。工学部は、その責務の一端を果たすために、70人を越す若い大学院生共々これらの研究にまい進するとともに、将来これらの役割を担ってゆくべき意欲ある若者を、しっかりと教育して世の中に送り出したいと考えています。自らの頭で考え判断することのできる創造性豊かな技術者の育成こそが、最も大切であると考えます。そのためには、高校教育と大学教育の較差を埋めるブリッジ教育や少人数のゼミナールや演習、きめ細かい魅力ある実験教育などのさまざまな教育プログラムを用意し、徹底した基礎力の養成を図っています。

豊かな人間形成は、真の学問を学びとる厳しい自己研鑽によってこそ培われると信じて、全教職員一丸となって努力して行くつもりです。どうか新生工学部に注目されてその今後に大きく期待して頂きたいと思えます。

輝く教育・研究

先端バイオで環境を守りたい

工学部教授 遠藤銀朗

工学部の環境土木工学科では、遺伝子工学を使って環境を守るためのバイオテクノロジーの教育・研究に取り組んでいます。「二度と水俣病を起さないために」と「バイオで地球環境を守ろう」が合い言葉です。この教育・研究を通して、4年生は素晴らしい卒業論文を仕上げます。そして、大学院生は世界の有数な科学雑誌に論文を発表します。世界中から反響のあるトップレベルの研究が、日々続けられているのです。



International info.

国際交流センターより

留学をするためには？
「交換留学」「夏期留学」
「認定留学」3つの留学制度

本学には、各協定校へ長期間留学する「交換留学」、夏休みを利用して協定校のアーサイナス大学へ短期留学する「夏期留学」、そして本学が認定する外国の大学等に留学する「認定留学」の3つの留学制度があります。

「交換留学」には、本学での学業成績が良好であることに加え、留学先の大学で講義を受講するのに十分な語学力を身につけていることが求められます。毎年1月に行われる出願の際には、TOEFL等の各種語学能力検定試験で既定以上の語学力を証明する必要がありますので、定期的に行われる語学検定試験を受験して、準備を積み重ねることが大切です。

「夏期留学」は、今年で30回目を迎える本学で最も歴史のある留学制度です。参加者は、夏休み開始とともにアメリカのアーサイナス大学に飛び、「アメリカ研究講座」を受講しながらキャンパスライフをエンジョイします。その後、ホームステイを体験し、アメリカ大陸横断旅行に挑むという、短期間ながら内容の濃い留学制度です。募集は例年、前年の10月上旬に行われます。

「認定留学」をするためには、前もって留学希望大学から正規の講義を受講するための入学許可を得なければなりません。その上で、所定の「認定留学願」を国際交流センター事務室に提出し、学部・学科等の承認を経て学長の認定を得ることになります。「認定留学願」は、留学の4ヵ月前には提出できるように準備をする必要があります。

このほかにも、中国や韓国の協定校への交換留学や語学研修のプログラムがあります。詳しくは、国際交流センター事務室へお問い合わせください。

国際交流協定校

Ursinus College アーサイナス大学(アメリカ)
Franklin and Marshall College フランクリン・アンド・マーシャル大学(アメリカ)
Fachhochschule Wiesbaden ヴィースバーデン大学(ドイツ)
Pyeongtaek University 平澤大学(韓国)
Nankai University 南開大学(中国)
University of Durham ダラム大学(ギリス)
University of Ulster アルスター大学(ギリス)

問い合わせ先 国際交流センター事務室
TEL 022-264-6425/6404
E-mail: "IC0@tscc.tohoku-gakuin.ac.jp"

Institute for Research and Center info.

研究所・センターより

市民に求められる
宗教音楽活動を目指して
宗教音楽研究所

本研究所は、宗教部長を所長に、以下数名の宗教部副部長と音楽担当教授によって構成されています。キリスト教と宗教音楽の2つの視点から、市民に開かれた活動を展開しています。

「宗教音楽の夕べ」は、本学の学生合唱団4団体を中心に、指揮：岡 光治氏、ソプラノ独唱：鈴木美紀子氏、バス独唱：熊木晟二氏により、第1部フォーレ作曲「レクイエム」、第2部オルガン独奏中野ひかり氏の構成で、6月22日(土)午後6時から本学泉キャンパス礼拝堂で開催されます。今回、合唱団員を広く本学卒業生や一般市民に参加を公募していることが特長です。

2002年公開講座「パイプオルガン演奏法」は7回目となり、受講生は大学生から社会人と幅広く、東北各地より参加しています。5月28日(火)の開講式、全8回の実技レッスン、そして11月5日(火)午後6時から、泉キャンパス礼拝堂において受講生による修了演奏会が開催されます。受講生の中からは、東京芸術大学オルガン科やフェリス学院大学音楽学部への進学者、本学礼拝オルガニスト、各個教会礼拝オルガニストなど、幅広く活躍しています。

「今井奈緒子パイプオルガン演奏会」を、今秋10月下旬に泉キャンパス礼拝堂で開催する予定です。なお、年間の活動については、毎年3月発行の紀要で報告しています。

問い合わせ先 宗教音楽研究所
TEL 022-375-1185



Library info.

図書館より

東北学院大学図書館のこれから(その2)

前号に引き続き、本学図書館の現状と今後の展望について、図書館長からの報告です。

(2月20日発行の第9号より続く)

第3に、本学図書館所蔵をさらに充実することがあります。本学図書館には100万冊を超える蔵書があります。その中には、116年の歴史を通して蓄積してきた貴重な図書・資料が相当数存在します。しかし、本学を代表する特色あるコレクションは何かと問われるならば、比較的小規模なもの若干を除いては、残念ながら「これこそ我が大学を代表する他に類例を見ないコレクションである」と言うものがないのが実情です。近く迎える東北学院創立120周年を記念して、本学が世に誇る「特色あるコレクション」形成を長期計画の中に組み込まれることを願っています。なお、これが実現される場合は、1) 建学の精神に深く関わること。2) 本学の各専門分野に、できるだけ広く関わる分野であること。3) 他の大学等にあまり類例を見ない分野であること、などの条件が必要でしょう。もちろん、教育研究の資料として優れた価値を有する図書類に限られることは言うまでもありません。

また、これまで元教員をはじめ本学に関係のある方々から、貴重な蔵書の寄贈をいただき、これを記念文庫として大切に保管・利用してきました。この中には、今では購入できない多くの貴重な図書もあります。本学は、多くの同窓生からさまざまな形で支えていただいておりますが、あらためてお願いしたいことがあります。それは同窓生や知人の方に、引越したり旧宅解体などを機に、古書や古文書を処分したいと考えている方がおいでになれば、是非、図書館の充実のためにご寄贈をお願いしたいのです。その中には金銭では購入できない貴重な研究資料が含まれている可能性があるからです。なお、「貴重な」ということは、必ずしも市価が高額であることを意味するわけではありません。あくまでも研究用の資料・図書として貴重という意味です。もちろん、ご寄贈いただければありがたいのですが、先祖伝来の家宝といったものであればいただく訳にはいきません。この場合は、ご寄託(お預かりし、いつでもお返しする制度)いただくか、あるいは写真撮影だけでもお許しいただければと思います。心当たりのあります方は、図書館事務室にご連絡いただき、図書館の充実のためにご協力をお願いいたします。

問い合わせ先 図書館事務室
TEL 022-264-6491

Organization 教学組織 - 平成14年度の新体制 -

本年度より、工学部の4学科の名称を「機械創成工学科」「電気情報工学科」「物理情報工学科」「環境土木工学科」に変更しました。また、大学院経済学研究科に「経営学専攻」を設置し、さらに、大学附属研究所として「ヨーロッパ文化研究所」を設置しました。



「ヨーロッパ文化研究所」を新たに設置

平成14年4月にヨーロッパ文化研究所が新設されました。大学院のヨーロッパ文化史専攻を構成する教員9名の所員で船出しましたが、おいおい学内外に所員を委嘱します。3年前からはじめた欧米諸大学歴史学関係博士論文の収集(現在4,500点余)と学術誌『ヨーロッパ文化史研究』の発行(現在、第3号)の仕事を引き継ぐ予定のほか、講演会など多彩な事業が計画されています。文献・雑誌などの継続的な収集も行います。

大学院経済学研究科に「経営学専攻」を設置

本年4月に増設された経営学専攻(修士課程)に5人の入学者を迎えました。経営学専攻は研究・教育者養成だけでなく、地域社会・経済の発展をリードできる高度な専門知識を有する職業人(例えば、ビジネス・プロフェッショナル、会計スペシャリスト)の養成を目指しています。具体的な問題解決を進める一方、将来的なビジネス、さらには産業経済、地域社会の未来像を構築できる人材の養成を目指しています。

事務システム化の進展

東北学院事務システムの構築により、平成8年に、統合事務システムの核となる教務システムと財務・経理システムを稼働させました。さらに平成10年には、幼稚園部門から法人部門までを包含する管理系システムと、大学・大学院を中心とする教学系システムを統合的に完成させ、運用しています。今年夏には、学外とのデータ交換やソフトの利用をより快適に行うことができるようにするため、基本ソフト(OS)を最新のものに切り替える予定です。また、切り替えにあわせて、事務システムの一部を再構築し、Web化による情報開示を進めます。これにより、学生及び教職員に対するサービスの向上が期待されます。

就職部より

学生の就職活動と本学の就職支援の状況

平成15年春における企業の新規卒業者採用数は全般に抑制基調となっており、4年生を取り巻く就職環境は一段と厳しさを増し、いわゆる就職氷河期が続いています。それだけに、企業側の「厳選採用」がさらに進み、学生は狭き門を叩かざるを得ない状況です。この時期は、既に内々定を得ている学生、就職活動真っ只中の学生、これから就職活動を始める学生とさまざまです。これから内定獲得を目指す学生には、悔いのない活動に全力を傾けてほしいと願っています。

一方、3年生は、本学就職部主催による『就職準備のためのガイダンス』が始まります。言うまでもなく、現下の情勢に対応していくためにも、入学時から「自らの意識を持って学び、さまざまな活動を通じて自分を豊かに高めていく姿勢が何よりも大切である」と強調してきました。個々人の個性を活かしたキャリア開発が重要であり、今こそ、今日までの成果が問われようとしています。就職部では、低学年からのキャリア形成指導の支援を大学のあらゆるシステムを活用して行っています。このガイダンスでは、主に人生における職業の選択に際してしっかりとした職業観を身につけること、さらにライフプランを作り上げることを目的としています。

職業選択は、単なる「就社」ではなく、自分のやりたいことを実現する「就職」であり、そのために自己の「適性」を考えて企業を選ばなければなりません。しっかりと自分を見つめ直して、万全を期してほしいと念願しています。

就職部は、いつでも「就職支援」を通して学生を応援します。遠慮なく気軽に相談してください。

問い合わせ先 就職課 TEL.022-264-6481

Admissions info.

入試センターより

平成15年度の入試日程が決まりました。

一般入試 前期日程)

- 2月1日(土) 経済(昼・夜)、機械創成工、物情報工
- 2日(日) 経営(昼・夜)、人間科学、電気情報工、環境土木工
- 3日(月) 英文(夜)、法律、言語文化
- 4日(火) 英文(昼)、キリスト教、史、情報科学

一般入試 後期日程)

3月6日(木) 全学科・専攻

AO入試 第1次選抜の出願受付期間)

- A日程 1回目 8月28日(水)~9月3日(火)
- 2回目 9月18日(水)~9月24日(火)
- 3回目 10月9日(水)~10月15日(火)

B日程 11月21日(木)~11月27日(水)

推薦入試 学業・資格取得・キリスト者・スポーツ)

11月20日(水) 全学科・専攻

社会人特別入試(夜)

A日程 11月20日(水) B日程 3月5日(水)

編入学試験 A:一般・推薦、B:一般・社会人・外国人)

A日程 10月10日(木) B日程 3月5日(水)

問い合わせ先 入試課 TEL.022-264-6455

教育研究振興資金募集のお願い

学校法人東北学院では、平成11年8月1日から平成16年3月31日の期間を定めて、次の事業の完遂に向けて、教育研究振興資金を募集しております。広く皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

【募金目標額10億円】

1. 東北学院育英奨学基金の増額
2. 東北学院高等学校校舎(家庭実習室等)整備
3. 東北学院大学教育・管理棟建設(土樋キャンパス)

詳しくは、東北学院法人本部募金事務室までお問い合わせください。
〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1 TEL.022-264-6467 / FAX.022-264-6458

東北学院大学

土樋キャンパス
大学院:文学研究科、経済学研究科、法学研究科
学 部:文学部・経済学部・法学部(各3・1年)
文学部二部、経済学部二部
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6421 FAX.022-264-3030

多賀城キャンパス
大学院:工学研究科
学 部:工学部
〒985-8537 宮城県多賀城市中央一丁目13番1号
TEL.022-368-1116 FAX.022-368-7070

泉キャンパス
大学院:人間情報学研究科
学 部:文学部・経済学部・法学部(各1・2年)
教養学部
〒981-3193 仙台市泉区天神沢二丁目1番1号
TEL.022-375-1121 FAX.022-375-4040

東北学院中学・高等学校

〒980-0811 仙台市青葉区一番町一丁目9番1号
TEL.022-227-1221(代) FAX.022-227-6302

東北学院榴ヶ岡高等学校

〒981-3105 仙台市泉区天神沢二丁目2番1号
TEL.022-372-6611(代) FAX.022-375-6966

東北学院幼稚園

〒985-0862 宮城県多賀城市高崎三丁目7番7号
TEL.022-368-8600(代) FAX.022-309-2655



ウーラノス

東北学院大学 広報誌 vol.10

広報誌編集委員会

委員長	総務担当副学長	関根 正行
副委員長	総務部長	飯土井 洋
編集長	宗教部長	佐々木 哲夫
委員	文学部教授	遠藤 健一
	経済学部教授	小笠原 裕
	法学部教授	斎藤 誠
	工学部教授	星宮 務
	教養学部教授	片瀬 一男
	総務部次長	高橋 征士
	総務部調査企画課長	石井 勝雄
	総務部総務課長補佐	桔梗 元子
	総務部調査企画課係長	小原 武久
	総務部調査企画課	石上 貴繁

東北学院大学広報誌 (ウーラノス) に関するご意見・ご質問をお待ちしております。今後とも皆様のご期待に沿えますよう、編集いたします。なお発行日は、6月・10月・2月となっております。

発行日 平成14(2002)年6月20日
編 集 東北学院大学 広報誌編集委員会
発 行 東北学院大学
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-364-6424 FAX.022-264-3030
URL http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/
E-mail c.kikaku@staff.tohoku-gakuin.ac.jp
印 刷 ㈱工エイエイビー

